

つなぐ。仙台

政令指定都市・区制移行30周年に当たり、さまざまなテーマに沿って、これまでを振り返り、これからを展望していきます。

これまで

「杜の都・仙台」の歩み

「杜の都・仙台」の歴史は約400年前にさかのぼります。伊達政宗公が果樹などの植樹を勧めてできた屋敷林、お寺などの林、広瀬川や青葉山の緑が一体となり、まち全体が緑に包まれていたと言われます。昭和20年の仙台空襲でまちの緑は焼失しましたが、杜の都の再生を目指し同20年代から都市公園の整備や青葉通・定禅寺通にケヤキの植栽が行われ、今の仙台の代表的な景観が形作られました。昭和30年代頃からは仙台でも高度経済成長による急速な都市化が進行。開発の圧力から緑を守り育むために、昭和48年に「杜の都の環境をつくる条例」を制定しました。平成10年には「百年の杜づくり」事業をスタート。「市街地の『緑の回廊づくり』や「市民による100万本の森づくり」など、市民や事業者と協働で、百年という時を味方に、緑をつくり、守り、引き継いでいく取り組みを推し進めました。平成25年には「ふるさとの杜再生プロジェクト」を開始。震災により甚大な被害を受けた東部地域における、海岸防災林などの緑の再生に取り組みんでいます。

「杜の都」の「杜」は、自然に形成されたものではなく、人々が長い年月をかけて丁寧に手入れしてきたものでもあります。次の時代に、より良い形で、この「杜」をつないでいく取り組みを進めていきます。

インタビュー

まちの緑を活用し、世界のSENDAIへ

JR 仙台駅で新幹線を降りると、プラットフォームから青葉通の緑の屋根が見えます。こうした緑豊かな都市は全国的にも珍しく、私自身も含め県外から来た人は、仙台の街路樹の美しさに驚きます。これまで日本各地を見てきましたが、中でも定禅寺通のケヤキ並木の眺めは日本一だと感じます。

この「杜の都」は、世界的に注目されているグリーンインフラ(※)においても一歩進んでいます。仙台でのグリーンインフラの効果は、大きく三つ。その一つ目が防災と環境保全です。東日本大震災で津波被害を受けた沿岸部では、津波が想定される地域を農地や林にすることで、防災・減災を推進しています。これは市街地の緑においても同様で、地面が緑や土であれば水が浸透し、地球温暖化による豪雨などの被害も軽減できます。

そして二つ目は、経済効果です。「杜の都」というイメージや風格によって、そんな仙台だから住んでみたい、働いてみたいなど、都市経済を活性化するエネルギーの一つにもなっています。例えば、昭和40年代に開発された泉パークタウンは、日本の中でも最高水準の住宅地域です。この水準が先例となり、その後の民間企業による開発も質の高いものが続き



昭和30年代から植栽されたケヤキが成長し、定禅寺通は「杜の都」の象徴に。グリーンベルトではイベントが開催されるなど、にぎわいの発信地にもなっています

ました。それが仙台の価値を上げ、企業や工場の誘致につながり、仙台都市圏の経済発展にも寄与しています。

さらに三つ目の効果は、「杜の都」という言葉です。それが大好きな市民がいて、地域の誇りになっています。この言葉があったからこそ、仙台が目指す姿も明確となり、戦災復興から今日まで緑を育てていくことができたのだと思います。

こうした素晴らしい資産をもった仙台には、国際的に競争力のある都市になってほしいと願っています。今後もまちの緑化や魅力ある公園づくりを進め、日本の中の仙台から「世界のSENDAI」へ。

人口減少が進む東北全体を牽引するためにも、さらなる発展を期待しています。

宮城大学 事業構想学群 教授

舟引 敏明さん



■プロフィール／東京大学を卒業後、国土交通省で公園緑地、景観に関する立法・運用に携わり、平成28年より現職。日本都市計画学会常務理事、杜の都の環境をつくる審議会副会長などを務める

※コンクリート中心のグレーの人工構造物によるインフラ(インフラストラクチャー=道路、下水道、公園などの基盤施設)に対し、自然や生態系の働きを利用した緑のインフラのこと



在仙のイラストレーターの佐藤ジュンコさんが、取材時のこぼれ話をお伝えしていきます